バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 143 号　〔2017 年 1 月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 明けましておめでとうございます。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 143 号をお送りします。今年最初の集会は、恒例の聖書研究会で、ルカ福音書 6 章 37-42 節、「人を裁くな」について学びました。

人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることが無い。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられる。押し入れ、ゆすり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。（ルカによる福音書 6 章 37-38 節）

ここで言う「人を裁くな」という教えは、社会的な意味で裁判など不要と言っているのではなく、6 章 36 節で主イエスが「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深いものとなりなさい」とおっしゃったように、「他人に対して愛の無い批判をするな」「憐れみの無い批判をするな」と教えておられるのです。

私達は自分と相性が合う、自分に同調してくれる人を「良い人」と言い、そうでない人を「嫌な人」「悪い人」と決めつけがちですが、これが「裁く」ということです。神様の存在を無視して自分中心の人生を歩むことをキリスト教では罪と呼びますが、全く自己中心的な視点から人を裁く時、それは神の前に罪ある行為なのです。

しかも、私達の中には二つの秤がある。例えば大切にしていたお皿を割ってしまったのが子供ならば、態度が悪いとして厳しくしかり、それが自分なら過失のため非難の余地はないでしょう。皆で集まって他人の悪口を言うのは楽しくても、いざ自分が悪口の対象になると夜も眠れないほど怒りに満ちてしまうでしょう。つまり、「人のすることは悪い」という秤と、「自分のすることはそう悪くない」という二つの秤があるのです。

しかしイエス様は、「赦しなさい。そうすればあなたがたも赦される。与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、ゆすり入れ、あふれるほどに量りを良くしてふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。」と仰っています。私達が人を裁かず、かえって与えるときに、神様は私達を赦し、私達が量る秤であふれるほどに与えてくださるとおっしゃるのです。

40 節に「だれでも十分に修行を積めば、その師のようになれる」とありますが、これは仏教のような苦行タイプの修行ではなく、聖書に書かれた神のみ言葉に聞き、従い続けるうちにキリスト者として成長するということです。主に聞きしたがって行動するとき、私たちは時々驚くような恵を実感することがありますが、そうした経験を繰り返すうちに、神様からいただく祝福を確信して行動できるようになり、自分の損得を考えずに人を赦し、与えることができるようになっていくのではないでしょうか。

私達は誰でも罪人です。それは、ヨハネによる福音書 8 章 1-11 節にある記事（石打の刑に処すべき姦淫の女への刑執行を迫る人々に、「罪のない者から石を投げなさい」とイエスが言うと、一人残らずその場を去って行ったため、イエスも女を罪に定めなかった）に共感を覚える点で明らかです。主イエスのこのような一言で、人々は自分の罪が見えた。自分の目には丸太（梁）が突き刺さっていることが見えたのです。盲目の者から見える者へとされたのです。

神様に心を向けるとき、私達は自分の罪に気づきます。そして人の粗やまちがいを裁けなくなります。神様に自分の罪を赦していただいてきたのだという大きな恵に気づいたとき、私達は人を憐れみ、赦す者とされ、赦される者となるのです。